シモマッチの校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男　岩手県立花巻北高等学校長

新連載

なぜ私は校長になったか

こんにちは。今回から連載を担当することになりました。「しもまっち」と気軽に声をかけてくださいね。原稿を書いている今、私は花巻北高校の校長なのですが、実はこの3月で退職です。そういうわけで、昔のことを振り返りながら、そして、それが未来に届くメッセージになればいいな、と思ってこのようなサブタイトルにしてみました。

私はずうっと、「教師は授業と担任と部活」という信念を持っていて、管理職になろうなんていう思いは微塵もありませんでした。ところが、県外交流に立候補し、青森県の高校に勤務したあたりから、「自分を磨く」という内側に向かっていた思いが、「生徒全体をハッピーにすること」「そのためには学校をよりよい場にすること」というようにそのベクトルが外側に向き始めました。授業改善の文脈で言えば、「私のスペシャルな授業実践」から「私たちの授業改革」という同僚性に、さらに「私たちが目指す人づくり」という学校マネジメントに思いが向かい始めたのです。そして、53歳のときに初めて副校長試験を受ける決断をしました。今回はそんな私が、2年前に花巻北高校（花北）の校長として赴任した際に感じたことを記したいと思います。

「目的」は「夢」

花北の校長は、県高校長協会の教育課題検討委員長という役割が振られます。この会のミッションは、県内の教育課題を集約し、校長協会としての重点目標と具体的要望事項をまとめ、改善提案をするというものです。私はこの担当になった当初は憂鬱でした。一体どのような手順で行えばいいのだろう。日々の業務に追われる中、何とかヘマをしないようにという気持ちが先立ち、昨年度のファイルとにらめっこして「例年どおり」の形で「こなそう」とばかり考えていました。ところが、本校の職員と学校課題について対話したり、各部会から上げられた課題をまとめる作業をしながら、自分の中に眠っていたある問いが立ち上がりました。それは、「なぜ自分は管理職試験を受けたのか」というものでした。

なぜ管理職試験を受けたか。それは校長になるためなのか。そうではない。それは目的ではなく、あくまで手段なのだ。目的は「いまの学校をよりよい場にすること」だったはずだ。それを実現するための手段として、管理職になるという道を選択したに過ぎない。そんな自問自答がありました。

イラストも作者本人

ところで、「目的」は「夢」と置き換えることもできます。植松電機専務の植松努氏は講演会などで、「自分の夢が、夢か手段かを判断するためには、その夢にプランBがあるかどうか考えてみるとわかる。プランBが思いつかない場合、それは夢ではなく手段であり、その向こう側に夢がある」ということをよくいわれます。なるほど「校長になる」にはプランBはありませんね。

では「なぜ、校長になったか」と問われれば、私は「いまの学校をよりよい場にするため」と答えるでしょう。すると、そのためには「校長になって学校経営を行う」以外にも様々なプランが考えられます。「いち教師として良い授業を提供し続ける」「部活動の指導者として、心身ともに健康で、地域に貢献する子どもを育てる」「担任として生徒との触れ合いを通して彼らの人生をサポートする」「教育行政の道に進んで、改革の本丸に関わる」などなど。

いろんな道があり、それらはどれも同じように「よりよい学校をつくる」という夢につながるという点で、等価であると私は思います。そう考えたとき、私が担当する、教育課題検討委員会の仕事は、部活動や授業を持たない校長にとっては、まさに、夢の実現のための、より具体的で、直接的な試みであるということに気づきました。私は、それに気づいたことで、「やらねばならぬ」の呪縛から解放されました。

自分が、教育現場で理不尽に感じていることや、信念を持って変えたい、守りたい、と思っていることを素直に出せばいいんだ。そして、他の委員の方々と叡智を結集して、解決のために前進していこう、と。そう考えると、これは多忙に拍車をかける苦痛なタスクなんかではなく、非常にやりがいのある仕事だと合点がいきました。

そして、今こうして「月刊高校教育」に執筆させていただいているのも、同じように「いまの学校をよりよい場に」という思いにかられているからです。そのために私にできるささやかな一歩を踏み出し、全国の志の高い皆さんとつながっていければと思います。どうぞよろしくお願いします。